小條五代記　巻五

G 29
777

北條五代紀巻第五之目録

北條氏直と滝川左近将監合戦乃事
関東若侍取義兵粮なる事
下総國府臺合戦乃事
八丈嶋の渡海乃事
江雪入道一具の事付男女別乃事
清水太郎左衛門大力乃事
若者軍乃事
松尾の葉への事付山上宗二事
先陣軍に討負二陣より切返す事

G29/777
東京帝國大學圖書印
B 34229
00078895 7

北條五代記巻五

○北條氏直と瀧川左近将監合戦の事

聞しは昔尾州織田三郎信長、永禄年中京都へせめ上り、三好悪逆を追討し、義兵とかけ、天下に威をふるひ、正上三位大納言右大将平朝臣信長公に任じ、関西となびし、終に天下掌なれし、甲州武田四郎勝頼敵たるによって、信長公天正十年の春甲州へ発向し給ひ、同三月十一日勝頼、太郎信勝父子をほろぼし、猛威を遠近にふるひ給ひぬ。相州北條氏直は信長公と通じて一味し、勝頼とは敵対か

されバ是によつて信長公と合として駿州へ出馬の所
に勝頼方の城〻興国寺。三枚橋由比城いわを退ぬ氏
直ハ浮嶋原吉原まできたるを立。富士のすそ野を里
吉田村を放火し陣をかまへ又勝頼に一味せる西上
州の侍ども氏直にいきかひよせそれぞれ深沢へ道しるべす
その後ところ甲州へ氏直ハ信長公へ出仕せ
然に氏直名代として北条陸奥守氏照甲州へ参着
し。大鷹三十聯馬五十疋とを上せ。信長公陸奥守
に対面ありて陸奥守座がしく此国をわたし。信長公ハ甲
州より引かへし近江安土の居城へ馬をおさめ給ひぬ

西上州仕置として滝川左近将監一益をさしをかる。
又上野国東方の職に任ぜられ奥州までも取次
其外切取べき令旨を滝川信州小室へ来つきそれより
上州箕輪へうつり後同国厩橋の城にありて下を治
るゆゑに近辺従ひなびき。倉賀野淡路守。内藤
大和守。小幡上総介。由良信濃守。安中左近大夫。深
谷左兵衛尉。成田下総守。上田安房守。山上近江守。
木部又内大輔。長尾新五郎らも滝川が下知
にしたがひ其の者の人たちとゝもに。箕輪の城に
へうつりいさいひめぐらし櫃が廐の廐をとる

かならし。然るに信長公。信忠公父子京都にをいて。
同年六月二日明智日向守光秀がためにうたれ
されたまひぬれば上州へ告来る。滝川せめて
ろうしが。智謀武略の者なれば。上州の侍共にはかりて
此義をかくしければ。も色の侍さらにしらず
しらせず。滝川かくして。当月二日信長公父子。京都にて
とうじ。明智日向守がためにうたれたまひぬ。滝川
京都へせめ上り。主君とむらひ合戦し。日向
守を討なば。さんをもとめ。九。西国にて
柴筑前守秀吉わり。柴田修理亮勝家が。

越前にありて。隣国なれば。討て上るべし。去ば上中
物頭。二七度まで伺せたれども。滝川まことならずとしられ
とうらん事安かるべし。然ば小條氏直。此義と知て
上州へ出馬とべし。然がたくはやくれ氏直と合戦を
なし上州諸侍一味あるべき。さて。さらばいかゞやと云。上
州衆はいよいよしとやて滝川此一大事とやあるべしとぞ。
あかりける事。義を守り命をすてんとる大将
なりとも。くるしからず。此義是非に及ばで。
御…の人へは。滝川がみはかりなり。各同心
しかる後は。先にも申ごとく。一味せしとんべ

をさとのく一同に瀧川ぶしを望む。ここにてぞん
ねと旗幟の色ひをなしていさく。氏直大軍にて
よせ来るといへど合戦のならひ多勢小勢によら
ず勝負を決する事は士卒の心ざしと一つに
するによりとも上一方にかたよりひと決し一方あま
勝事とせば武略のかたにはあらずひとへよ天運を
守り名をぞをしみし死をかろくするとりて義
とせりど変語いくさにおいては敵に気を
のまれ味方をくじかるるに似たり。瀧川小田原兵
使者をたちくはそれぞれ六月二日信長公
京都にをいて明智日向が為に討れ給ひぬ。是
によりて瀧川京都へ上り是非を決せんのぞみあり。
前橋の居城をわきを渡すべしと急ぎさまく家
らべしと武州鉢形の城主北条安房守氏邦
取へ使者を立て安房守氏よりしと申す。様は瀧
川上下のをおがりとほどみそり西上州をかゝれ
一人して切て出んとなされば引て氏直出
馬とともにうど前陣にすみ上武のさかひ神
奈川を越金久保までおしよせる氏直は中
わへど小田原を打立先陣は富田石井急によはし

氏直ハ安房が陣場二里こなたなる所に旗を立。
後陣ハ深谷熊谷に見ゆ。終に滝川左近将監を。
金窪城の方にまかりて後陣也。西上州衆ハ前陣
おびたゞしく見へ里。安房守手勢をもつて氏
直ハいまだ出馬なし。安房ちからを一手汁ハ栄の勢をもつて
もいざ打ちへんと。一同しなけれバ六月十八日の
巳の刻よりはやく合戦を。始りて上州衆切勝安房ち
敗れし二百人程討ち。味方の陣へ乱入。上州
衆初合戦にうちも勝いさかひたるゆゑに氏直是を
見給ひ一戦をすゝめかし。金窪へかゝりける。軍勢

増慢とゝめる事云雲霞のごとし。上州衆大軍を見
て肝をつぶし生きてかへるべき事。鶴翔が谷
かまへうちも早く居城へ引退くべき評定
ありし滝川是を見るとそれぞればせける折りて云ける
前陣の合戦に上州衆切勝事。かまへ天下に
比類なきへしども。次の合戦にをそへバ滝川前陣
住べし。上州衆ハ後陣に添べしと云まゝ。金旗
の旗をさしてか生打立。是を備。津田次右衛門尉。舎弟
即。同理助。滝川儀太夫。篠田五郎。牧野伝蔵
篠忠右衛門尉。栗田金右衛門尉。報経弐文右衛門

田市右衛門平三。太田又右衛門。村松田九兵衛。津田
小平次。其勢二千余騎。出もせず。手勢を村上人保
の方へと向けるに。將門馬よりおりて。令の二つぞんじ。
先を以て。大敵をさゝへしが。乱軍となり
えさる猛強の大將也。將門鶴毛の馬に乗さいとうが
ひらめかし。鑓を引くゝみ。よせにかゝれくと士卒
といさめて下知をなしけり。將門が家老。篠原平太
兵門村。前登小十郎。むらかみ抱へ篠も。こゝに都中
の者たち。篠原をはじめよ。將門が人数は。たゞ一ま
い。井にかくる馬の乗ぞことなし。民家数万軒
そせいにて。下て西もつくしと切てかゝり。民家
先手に松田尾張守へ道大道寺。振河守。遠山甲斐
守。明石伊与守。山本上野守。月所伊豆。福島伊賀守。保
田大膳。高原山城守。清水太郎左衛門。伊勢備中守。松
田肥後守など切てかゝり。追つまくりつ首をとりける
に。民家すでに討負てにげんとしける。勝
に乗て。将門。かまびすしく追けり。切々せめ。さ計二千余人
討死したり。上刕。前は將門がかまへしをのれく
が居城へ引て。將門は其福井をさして引取
意をかけ。酒宴し。敵をかくし。將門扇をとり

て静かなることなし。暁天いまだあけざるさきに。其勢を
打立て、あちこちをせんとす。小室、明井よりも発起し。
其番頭を越て、伊勢の国はむかしへの所知なりしと
鳴とうやうに並び。多勢なるに兵粮、味方ひでるさ承る。
義をかまへんじ。命をかへんじ。一合戦し、路絶をとく
おさめたるとぞ人盛せり

○関東前侍所義更様なる事

九しきも、しりし。相模小田原小條家の侍。仁義礼智
信を専らとし、所務絶にもくし。源平両家の
能々にらきし。八十氏の旧流をくんで天下り
をいて、翁しかりせば、都に前因をかんじて、果をかすと前
高下あとかりとこえ、我くの多明をゑて、上を敬ひ
下を憐み、仁義を行とせり。殊によりて弓馬の学びをこ
みる事すなわち。並ぶは民政公、月七日は弓場にて
いてば弓よく見つけ、蒔木大学殿をおそし。射手の荒
余候は八日には鉄砲をしめ。数日は、おもくどのして武
藝をわしかれども。文武の馬場と号し、長さ六十間。
横三十間なれど。犬上抛の弓場なり。射手は弓はし並
を乱し、馬にて家人は二十疋、三十疋をそれぞれを射手は
安をそれと矢数をわりて。小笠原慎下る。是を執

則も大学に一家仁なるときんば一国仁をおこすと
いへるごとく民皆仁をとりえてそしれば諸侍仁を
おこなふ仁者は山をたのしむといひて山はうごかず。
仁は常にかはらず草木禽獣生ずるがゆへなり
かゆへに仁は五常のはじめにして義礼智信の四つは仁
の用なり。釈名に義は宜なり。万物を裁制して其
宜きにかなはしむるといへり。義の字の心は、よろしきと
云字の心。万事よくおさまりてそれぞれにおさまりよく
せしむる也。孟子に辞譲の心は礼のはじめなりと。謙
尊卑の差別、長幼の次第をよくみだらず敬ひおそれむ

礼の字なり。礼は朱文公が、礼の字は敬にありとこそ
極め智者は水をたのしむといひて万事に通ず
るが智の字の心なり。論語に人として信なくんば
それ可なることをしらず。大車に輗なく小車に
軏なくして何をもってゆかんやといへり。王龍谿は
仏家の五戒をもって則儒道の五常とともにさ
まつる五常の法をのべ。曲礼、礼記に礼儀三百威
儀三千といへり。周公旦の作られし儀礼と云物なり。
礼儀が三百條あり。威儀の立居ふるまひが三千條
ありそれに又書くはへたる礼義の作法わけて計

ありしかども。鎌倉にて関東諸侍等に礼義をみださしめ。敵
味方によらず。大名まかる人をば。等の物語にも口に
されくはいはれども。当方不見の人にはわざといはでも。
道路の辻山野藪原月の籠具わるひは家の言備。
あるひは上臈かへ。神社仏寺などの前にてはかならず
下馬をなし。これ信くりよにさりて礼義をも崩
至りよるべく。蹴踏の礼。終日をこそすれども。君臣の
礼はよくまもりて。上下のひとのため。諸侍の服装失礼に
ひし上下のひとのため拠衣紋のくさなりしは
と小田原北条へまゐり。等の敵に

山

賢臣二君に仕へず。と思ひ返せざるとて。牢浪と
なといひて。侍なる人は。若党小者まで尽きなし
東海道に云。東海道東国以東俗婦人まで
せぐくるとても。こに業ある日本東海中
国が邑を引くと云。昔関東敵味方合戦し。首
きりての時。くろの首とて侍の首ごとくに上へ
そなりしに戦場へ出るには。討死をかけ。楊枝を
持ちてくろを付けるにはみしへの実盛は
びん鬚をそめて。小田原北条家の侍は
ろをも。古今ことなれば。もんさうしはかず

かくら梅又なづけしこさと名付くる。まなをもて大さり
本むきことに伐ら。をもなづけしこさやくぞしらる毛をぬ
きて又鬢の毛のわけごとにぬきとりしほ肉の見ゆる
まで抜みして鬢をとちびらんせさせくびんとなる
此をわけ髪へ置若衆本ま。鬢さきをかりしに
さのまゝくふにゆひて又はけりこゝく別りよりこゆき
ともつらくへもとしにぬとしせて乱ぞうきな
どのごとくぶ作ら付鬢してゆひ衣裳をとゝろふ
きものけかりんと名付てまろく引はくろひ糸
つゝをせるらの中がひ。のゆゑのけて膏盲乃

爰の見ゆるかとに若しとしく其の前をむなぐらぬ。
うしろがしとわけてこさ久ふとき種は後の見かんはさ
さぞんく後むかしの見ゆ又寸六寸かどくくりし也火の又年
以前まで八関東諸侍の形親風俗叮嚀によろ
こそ見え侍しとどの若衆も礼儀たゞしく作法もよ若
きさ乱もって礼義の事かさもくてそわるくめ昔関
東侍乃形義也又さく伝しさり今ハみ見らんかはゆり
みといひて其ふ業見かんれし通え乞もとも見る
なり我ざりやかる人が事もとも時の風俗と成
なりびてよかるべし

○下総国府臺合戦の事

此ほどより相模北條氏康と安房里見義
弘とかねて中わろく、太田美濃守武州岩付に
ありて謀叛をくはだて、義弘と一味となりけれ
義弘・義高父子下総の國へ發向しける國府臺
まで陣をとる。このころ國府臺とよばれし文に
國府臺は小弓代々の鵠臺、先書のとほり今の者に
いはれし國府臺と書しはかれは字面によりて
あたらぬ臺なり。武州江戸より北條家の者らも
ありと蔵永三郎左衛門尉が世をくつがへさの

川を前にあてゝ陣をとれば、それより下総小金に至る。
高城治部少輔出向ひてこれをむかふる。氏康は小田原へ
告来るによりて、小田原の城代留守居ものを残し
北條幻庵・松田尾張守・石巻下野守などとりて
よし殿しとき時日をとりさだめ、氏康・氏政父子
出馬して國府臺を中にへだてゝ向ひて陣を
かまへけり。義弘の中にまかせて引きとり
ぞく告来るによりて、氏康先手はなれ気をつけ
ゆきの勢をとゝのへ、敵は國府臺と二里ほど
引てしのびて味方は是をとりしも、高山の

永く牧野が党へ入かはりしがよく〳〵敵詰よるいくさを
まなこをいからし門で堅めてひしと充ち渡して居ればひしと
引く敵がの中本大勝さいなと門で守り居たりけり
こゝにはとみつゞて切て入て味方門を堅め中々の
首山丹後守父子が当永三良左衛門村山角左衛門
本家門村が岡越前守中條出羽守河村條理定を
ゆるめ百余騎られ勝軍をて民政旗がニ郡に
かくやて知して云敵々に負く長途と云ふ
先を討べしと團扇をあげ下知へば命にに義ところ
て雑兵共をかくまうけぞと追もひかへずまつしぐらに
責くかゝれとて切入り二敵と追廻し首を取
十村備を陣に雑と立られそら大軍の威敵
と民政旗が計略切かゝり後前代未聞
の猛大将と諸卒感じ給ひ民康の後陣まで
式義と知らせしに民康満足と思ひとて行きける
首山当永をうち世に念願する時日を経さ
ず一戦とぞくべしと評定とぞ也民政佐々が
その場のそこくひに味方敵を切入り一敗に
なる時にあら我郎従二人敵にまぎれ陣中
を見くまれとせんを取り二人見届そりてや～

敵先陣のやぶらるゝ事山名氏を討取、ていさ
はひはまる陰陽へめぐらしあわざり。清勢へ乱順
宴し千秋万歳とうたひ、よびて引分く。
後へ返さ先指もなく、かゝる世なりん事を
もどさまへいどまいは恥を知、従者は主人へのちゞまを
もちゆれど軍法のてがそへ行てなく。算をみ
だりなる術をもつぱら是義弘が運の末なるさは
ひとまよひくおわしけるや味方急によせくるに
あくい敵の前勢は陣を下りて向ふべし。次の
勢は中よ立。後勢は陣よ残り三所よわかて前

吉のそるひと近の士卒ら先れとうよわかの事
なるべしと先陣一手は蟷螂が斧を以て車を切るとよ
わくは後は後なりしよるの合戦をとぞそと。
氏政前陣と立。氏康はうしろよいてとも弱康の
利のなるひとのんづるよ敵は東方よはし。出ぶ
る日の光をかゝやかす所り。味方西よ向く故
光をかゝやかす事。是孤虚のつきまへ向かふ
ゆへ甚山名氏勝利をうしなひなるなり。依く今
卑朱の利も己。東敵は入日を受て味方の後陣よ
新まし時のうしろは吉事をえたりまた上也

年は甲子なり甲子は殷の紂がほろびし日なれども武王
も勝る年也。義弘は紂に同じ。氏康は武王に
比して見るを討んとあるなれども元祖の吉例多
し。早雲氏茂永正元年甲子九月武州立河原
にをいて上杉民部大輔顕定と合戦し討勝て顕
定敗北を遂ぐ。又氏綱大永四年甲申正月十三
日武州江戸において上杉修理大夫朝興と合戦し。
討勝て朝興を追討ち。就中七年七月八日甲
子正月八日に當る吉例なり。殊に又氏綱天文七戊
戌十月七日甲子なる時に於て小弓の御所義明

と合戦し討勝て義明をはじめとして悉く討取し故に其の
場にて数多の首を取りき。先例をもて其のまさしく吉例なり
又孤虚支干相剋相生はいつれも天の定むる所
なり。時刻をもへりみるも宜しく一戦に治定すべし。但
今度の東国の戦はかくも寺の恩し諸将を
二手に分ち旗の吉凶を按ずるなり。氏政筆にて卒
して家臣を二里下へ押廻り。義を知るは此
敵をしたひて討捕べき事なれども近き旅立。
大将へそむきそめしを大敵は是を志しと義弘
下知していたくまき負の刻の合戦すべしとなり

は勝利をえたり。安房の里見は、安房上総の合
戦に、国府台をせん陣にうられて大将を討死
されば敵前にくれども、身方の前陣のそれ〳〵は、さてぞ引
あらそはざらん。曉天にかへりあさの瀬をさばへし、此
いさかひよかの月又一合戦しかども、ついに討かちければ
さん事、其のうちにかはりと、籠り、日もくれ
かの里見が兵、そこくさくれども、あしけれは、身を休めん
そのうちひと眠ねぶり、水草よりいかの日の合戦を
ふけりとも、ゆめもなくして運命をかくる。時刻
到来すれば、ここに永禄七年甲子正月八日、申の

刻にいたつて、氏政軍兵をともなひて、ひそかに国府台をのぼり
とき、かの氏康は、むかひよせて、勢をうつて、国府台を二手に
わけ、おのおのさかんで、責よせ義弘、其外の侍合
とものまさきに、甚とちりて下周書をもとめて、上方へ分
てせめかゝりけるに、鉄炮矢さけびの声、天地をひゞ
かし、首をとりつとられつ、血はながれて、半時ほど
勝負もみえてざりしが、みなみな義弘討まけ。
およそ、もかくもと、ちさか切りて、追討せと
為の事、鴻の台にて、さればとて、敵方討死の
為、正木大膳、勝山豊前守父子、

羽監里見民部少輔同共来射。正木左衛門尉次男平
六平七。蘆名掃部助。松田左馬允父子。長南七郎。高
井信濃守父子。佐貫伊賀守。多賀越後守などもちじ死。
又千余騎討捕たり。上総国椎津。米村。金谷。稲留
されば城々此いさかひりしてことくに城とひらき
落けれバ此度の合戦ハ。氏康氏政父子勝けみ。切勝
手ら。北條新三郎河越ちらしても来り。彩骨と虫
七門涙。三月上総守父子氏康末子助五郎。新
太郎為群たりとて入たり。此戦ふ紀むめぐり。法の忠
節がくて死しけり。右の趣も氏康しり合戦の

翌日小田原城代伯父幻庵へ。一戦始中終とかきさ
のせられける状の文云と写しける者也。太田美濃守
為。二百騎討せくるを世気に含人へ。村上をもしめ。六人
を残しとも討まさ。養ハ二十。負東をさして逃
行ぬ。ここを落書に

よしひろく世のむね弓矢の名にさてかへくさ
洞目に太田美濃守そても見ざれば。氏康ハ分く
此度の合戦に男子の利を望とて軽に謀叛の
張ける人へ。太田美濃守を討りしこと事。也念千万
義弘ハ討死の此ゆそとも。首ハいまゝなくしとと

件の状は記されし後なれは義弘馬むしられ給ひける
に安西伊予守馬より飛でおりて義弘とのせらる浪二
人上総山へぞ分へ入そむけられけるをば浪人足付家
てもりそろ義弘の乗馬とみてく一番乗討死必定
かゝはさゝれば房州討もされの何れ主君を
討を生がひろえべうしとおげもりかもとがしの手き
なる分にまで出家し一人もへかせかなかわ
義弘三日なら上総山を分出房州へ退城し給ひけり
氏康高聲に旗を立
敵とう門んまかなる高聲[illegible]詠して入門

浦の里とよりり合戦毎に粗方を記し侍る皆是
氏康氏政具して復家にみそ落人おはしけれは遂に愛
小里見越前守忠弘の息り安房九郎弘次ごとく生
年十五歳いちぢんなりしが鵇毛の駒に乗かゝる
とりけ弓おゝくそこで一騎かかりに落行しを相模の
國の住人松田左京亮康吉を見てくおわつれ大
やみそりどうげと召るにむちうて追付そうち
らべてむずとくんで落ぬそり康吉剛者なれば
猶の数ごもせずそてりそ首をとらんとせし
がんぴまし来して紀のごとく紀のおんへ寄り筆り刀を

たてんかならずとけざるやとおもひけるにいかさま寵愛に絶
まで首をうちおとさんとせしが。とかくよまでぞ首討
落しさまぐにたけき康吉も渡りよられて。前後
にまよふ。倩おもひめぐらすに親くさう只目よりも早事ぞ
無なる捨ぞかし百年の栄耀も風前の塵一念
の発心は今後の灯となる。凡三界の輪廻を生死と見る。
無明の眠の中の妄想の夢ぞかし夫の仕合をも殺
心の縁なりとぞ後国にひとしく出家し浮世を改
名しは直実の武道をすてし一筋に黒谷弘次
の網をとりたて人として道心を発せしと云ふ

世の中はかくこそあれと名利を捨るにもあらず
こゝろかはしき世はさればかれのかなしきことよ。元ゆきにも
白骨となりてなにごとのよすがもなき世を観
ぞ古今集は

世のうきめみえぬ山路へいらんにはおもふ人こそほだ
しなりけれとよみしは家を捨妻子をもすてゝ世をのがれ
山に入康吉が心ざし感ぜられし。熊谷次郎直実が敦
盛を討て武士のならひかなしび世を遁出で
おもひ西国のいくさ川よりも黒谷法然上人の御弟子
となり入道して蓮生坊と名付給ひしに康吉が弘次

と読く。出家遁世とげける時、人々いひあへり。むかし

ざりけるもやさしかりける古人なり

○八丈嶋へ渡海の事

見しは今は昔、伊豆の国下田と云在所へ行しに、ある

人の云、里人語りしは、是より南海にあたりて遠く八丈嶋

ありて、此嶋は日本の地なれども唐国へちかく、唐

いふみとは、昔定ある時分、此嶋より見れば、唐

国は遠里近くて、雲かかれば、高き山がちに見ゆる国なり

別に島へわたるべしと、八丈嶋をとほくめぐりて

されども北条早雲の時代、関東より此嶋を見出せり。

伊豆の国の内に入る。北条氏直公時代迄は、毎二年に

一度づつ伊豆の国下田より渡海するに、大船に水

かこを乗せて、秋の比風よし八丈嶋へ行て、かの

年貢には其嶋の絹を納む。とぐりし嶋の所に

村田久兵衛と云者は、ひとり舟に乗り、年に八丈島へ

渡海せり。今において八丈嶋なかりしく、渡海また

かなはず、立そひ見れども、命の中にいま

一度八丈嶋へもいかんと、仏神へいのりたてまつる

しと、小舟にのりて、伊豆の江後寛、備後

頼み入道、三人、鬼海嶋へ渡りし事、古

さ矢によりてこそ此嶋の男女の生れ髪とちゞれても
ゆひもせず。ばらりとしたるがごとし。ちゞみて候
又黒く眼ひかりて。山田小手がしこく小佛の細とうる
されば米穀のたぐひもなし。薗の菓菜もなし
かまへ絹布の衣服もなし。只木の皮をあみて
て身にまとへども。多く雷のごとくおそろしく
てふところもなし。昔鬼が住ければ鬼海が
嶋と名付。又硫黄をほりて。硫黄が嶋ともいへり。されば
此日本にては。嶋守もかよはず。商人
の舟も行ず。此嶋は渡海遠き嶋なれば

いかなる夷畜生の栖なりとも。此嶋へ流されしく
輩ありと云。されど[illegible]是ばかりは東雲にて
我朝板部岡江雪入道は此等伊豆の下田の者
言坊主也。[illegible]右筆に[illegible]
まで[illegible]伊豆の嶋々の事をしるされける。
扨伊豆七嶋の内に[illegible]一年に八
丈嶋住して渡海の[illegible]
嶋の[illegible]物語を[illegible]
よき[illegible]女房[illegible]
取[illegible]

口はさおひくしく上その絹とはかうのそえて立派なる
浪ひ易常よ兜毅なるくせつまじさと一目みしより
我も我は修人乃ろがか義女よわかい事いふもの神
佛のはに引わせせでやと我身とかへりみんかよ色くろ
くろそくはそぐき賤しく衣れまでも見ぐるしければ
なまじひて辰るも何ぐしさに昔男の業平ぞかる中
将の身とも生れながら女房と契りをむすび天よ
ゆくは比翼の鳥地よあつては連理の枝となつそや
さふよ狩くもは唐の笑道唐土日外をそえれ南海え
赤るかふびそる偽あれば昔時天人わまそぶらは偽

と栖となりさゆらの女房めくれりけるぞ
姫さかくいうぞかかしまで容色天ひとつしひ
かふんさ夜ゆふ庭さしくる雨のゆかだ竹のよ
わこび雪れるぶ凸ひとしてかくる事なきさ
のぞきざれよ夜ぞかよわれぞれ浮立雲乃ご
とし也史記は士ハ我のみきとしなか者のくめよ
身ひら言女いをのまをとしろか者のそとめよ
ろちをゆろとせるがごとく我国乃女ハらかれり
白粉をぬり顔をみそよかざり房ば偽の女房哉
生れはさのまとかうさまくふろくぞ流る

さ。たとへていはん為、ありし物をかしこき斉菓紙
を御尊りそわそびに御さうしさ道をのこすと
かせりき吉相よ日かけの土雇物しく師しき双
しとらしきれバ何の色も男は恋じとしろちぶ
扨又男ハ女よりかたちの矣黒くとがらい御しさ。
為せ人形よ小袖をさせ女もろびしくなれバ
日かけ人も色まどあしんをかくさし ハ女房絹
を織ハ條家へ貢絹さしくおさむるれりや。むかし
より家主ハ女よしく男へもをすり仏ハ尊
三従を洗給ひて女よ三ッの家なし。此為ハ
世俗ハ女房よ男なしの三ッの家なし。其故ハ女子を持
ね事ハ嫁と親の家財とハ知をわたし男子を持
ぬれバ子をとそのかわりのひへ譲まなす事も諸事
女房の心よし引也。此為人日かけの女房也れバ為の
おさきものか立て國元となりりても好乃
家よ入て其家の女房とも書としてありける。
女房も天王へ祈をうけ我家へ國元ハしめ女
さ祈らふ。國元といハ日かけ人をいふ。國元の入ざる家
の女ハ天道をとうし見、男とかくちかへてさだめ也。
國元入ある家よろこぶ事たとへバかし天竺

住付く居くるるや親が不通の仕合なるく後
外し二なしびわ人子ならば扨又なびた紀人へど年
月を経しがそれよりはなかじもし我當なる舟。
此湯へ付なりしが湯の所嬢いそこそ来くやや
湯へわずし世話へ此国府を舞入させりべし此舟
よりすぐれ此目をど紀の女房の数へ入せなりしと。
国府ともなひ。今この家より一人宛へ出でと
家乃亭主出合。此むき入て下をたや。此よと
いての面目なり。後國まで縁とてわしませ
さてよくいとまごいしてよの在所へ行て年月
と送る女房舅親執下人までも此舞入目出度と
此湯とびわる事なく其の上におさわひ子と
きて云もるがごとく諸人集りくりてやし
それが国府と云の外のなりし玉の舞よき
て女御更衣わたりよみちくて都の花のむざる
喜見城の人のしひ是なり那鄲の夢のから
りしさめはうらせんとも云るのごと筆にも
うしがたしころるは

○江雪の道具の事　付　男女別の事

此ましき今。村田人出来入丈湯の抱ても右にくりく

ある人の云く梅又江雪へ乃が縫紀しそしてるたぐひかぐ。
皆の者ども紙をもして見せんと。筆尺ハ数を
なりし定家と錦路へ出でたきとりてや定家が
作りしと云ふにく程中とぞいまりてをりて
を形ハ守れて失てたる色やいて暮の頃へ今れが
皆の者とて見とりて見てく梅も路りやたいまかり
路ふぞぐうの面白や此國府の紙をなしめくかり
たり何事ふ見てまさりんと云江雪へ乃皆の
方角と知りてをるする形以参へて此皆は日体
よりハ南。ホ申なれわりてそれバ伊豆の國より紀
州熊野へ至く札ばて此江雪云新勅撰あり
和田乃原なるもひと川みな三熊野乃浜の南ハ
山のしもたしとしてしとそれぞ是ハ此皆乃女也。
飛いならしるゆかる猶ひ人とわまでも天人
くだりやまをる。昔天智天皇の御字大和の國吉
野の山へ天人あまくだりて舞をりしを見せし也。
人間かよふ山なれバむかしく天上へ帰りける大裏
五節の舞と云事此かをもて人の天乙女とまなか
びとりて新拾遺あり
神なへと。天津乙女もなりひさせまし野の夜の

しかし給りともよりかへてしそ、天し女しが島へ下りぬ。
橘となせるかや、義ハ人為世りよるべくしぞ。史記蘇
秦伝の注に、かの中かに世界ありて、ぞれハ商山の
四皓ハ橘の木の中ニ橘をそたのしむのごとく、えん
じや八丈女橘中にありて仙宮にて乾坤の外にて封
世界也ていまハ男ハ我朝の人也ニハあらして。
梵語漢語をしこかへ、和語と略る事不遜
からり。菊池盛又執朝の時代ニは天く、此島の流人
咎ハ東は島も西ハ法西鬼海が島より佐渡島東ハ
夷が島、南ハ伊豆の大島なりしぞ。毫島の沙汰かりしそ

然るに、永正年中、早雲宗瑞、伊豆の国を治め給ひ
しよりこのかた、八丈島の名をもつて、伊豆州奥野の住人
朝比奈六郎知明と云侍、わりあてられて、南海に至て島
をうしなひ、大船一艘に人多く乗て、伊豆下田
の湊より渡海し、彼島に着て民家となびかし、永代
伊豆の国の内たるべき旨申し、渡海し、早雲へ此
よし言上しければ、早雲感悦斜ならず、八丈島を見出
しける勲功に、伊豆の国下田の湊と朝比奈六郎知
明に下し給ひ、永代を持つべきとて、則今に知
り、子孫朝比奈兵庫助、下田を知りしに、此島より除

家々代々毎年の貢絹を納る事千秋万歳なるべし
し。信綱の男子に付く若とかんがなるに北朝より下野
芸那次郎の此諸乃時大将一ツとして列卒の内にあり
えけ下ふ。幕下ニなる村ゑをえらび下河辺六
郎行秀とゆう毛と射べきよし仰ありて厳命あり
ことなれども矢庭にかゝりけれど此庭せこの外なりし
家紐れにまた小山左衛門射射ゆ段村とでもなれね。
秀は世にまたえとなりし時帰り出家となる
熊竜しもりにて志も後紀州熊野にゆく智
定房と号し日夜法花経を讀誦し怠る熊野
那智の浦にも補陀落山に渡らんと一封の状を認めて智
定房同朋に遣して北条武蔵守殿へとぞ〳〵
乃向ひてそろ〳〵と紀州糸我の荘より先と結ぶ
去天福元年五月廿七日北條主人村ね是武州の
此武之此状を持参しけるに此所にて周防前司親実
披見しと去三月七日智定房熊野那智の浦より
里補陀落山に渡る。左信乃時より出家遁世以後の
事を記しも将軍家も不侍に然ありて一武州い
われく弓馬の友なりしわされ之時が附不ふ作
あらへて感涙をとゞむるとう弓矢取る分の

さていまだひ智道房が乳母は船屋形をとらへ。
まき中への瑕ゑよりいでをりて皆打付たりの扉も
なくして日月の光を見る事わざはぬぞやつぞ灯は
しるべし。二十ケ月頃の飯物なれびし此おやどれ
用意もともろく此補陀落山と云は南方海のはてなり。
せたのしむ世界あしくやがてこの八丈島の事
なるべし。智道房は渡りて天ひ女しく生ること
それより男とわきまへよゆへ日本の風俗とまま
なびけるあとも三百八十余年以前の事也
おやびしきとかしや父母女子ともまふさす

生祢ふのきし昔をそめしかの唐代玄宗の在
位の時天下の父母そろ若娘とうまん事を
佛神へ祈りまて称かふ長恨歌に此伸は天
下の父母のいとして男とう心事をかりせぞ
女とまるりとかろりんせしむしとまさ機網中も
ためさき事ならしとりあれし楊父女とともに
ありて年每ありて幼国のみわけ抱となやと
より用意せんとてみをとりなり絹と織出し。
めくるとそれは毎年へまちせりなと女房のやうし末代
家の系図ならむとかれ九若かあそれは後までの女房也。

我等らしと親を日ゝに継で絹をたちり業とす
事にしと渡りけれバ程中一年滞留し。二年目
の夜菊風にと誘えて。舟をと出さんと思ふへから舟
よ見のまゝハ枕かしへし女房なりけるとおもひしも
下人まで。も名残をおしみ涙へとつゝみ出すもとを
と渡りよ村ひし。舟ふよれ村桂よまどろ我をと
きてゆきさゝまふへしこやかへ流れきみの日か
人のんや今生の名残是まで今後の世よ
わひれん事と定かし。と是どり。舟で
よくさ数々ともらりきそふを振ゝたとへんや

うそなりけるぞそれ恋路と云事ハ昔が今ハかくべく
甘ゝとせり。後撰集より
出ければ愛よいて恋の我疫の猶や歩きし人
のをりまぞと平通盛ハよめり又定家の卿は
ちり山し数々も折しまぞのし猫のかんのまく
らし妻恋ふる音ぞ詠ぞし八丈鴻の恋路にまとふ
なりけぞ国元もさすが岩木ならねバなんよりて
を舟と出しより。ぞそれ一樹のかげよ宿もとし。一河の
ながれを渡きむぞとわかれバ名残と惜しむかな
ひそかし。寝覚一人まびゐて。幽王国をかくしきな。

玉妃もこれにあそびて玄宗世を失ひ給ひぬ。まし
てや此女房生ハ人男のうちにちかつきぬれバ是
天人あまくだり。優曇花なる二年の契りと別
となれバ又義の苦しミも是ハいかゞあるべき。
悉達のためハげにくさりのむつましき。尺迦菩提
のためハいんとくぞ十九歳にして都を出給ひしかバやし
ゆすらかなよよ名號をおしミ出給ひたり。佛檀
くのむかしハいんや凡まをやとおもひよりきち
かゝれハなまさかのめぐる根ハ目をあてられね
風情なり。江雪へ是を見て何とも毎まのを

それなるぞよくい奴原がある根ハ。皆一とせ海
為に御おろさんと力を極て。猶雑をもちいゆ
をり給ひけれバもうきよへど舟と止ミと陸
みくじびきの歎をするもくし海を門
たくゆまぞハ舟人へとらひ取れて激し
善もく前後も分かどもも行く歎もさ
あこれハ女とどもるさ不和よのかり笄の先き
白き絹をもとびつけ。のこかかくなからわが
やまさかりをかりたるる根ハ。欽明天皇の御時。
大伴の佐提比古。遣唐使してよりたちし海

時妻のさよ姫。名残をおしミ松浦山へのぼりつゝさ
ぬのひれをふりて母を招しかども舟ハへだゝりま
ぎんぞ。女のかなしさは国府へかへらず心ざしん
ぬさりぬるしるしとて石となりぬ。語のうす
人は語りもうたひつゝ、さるほどに人ひ切たる
しおせん久事を語り出し二夜抱ときふさ。
いひもくろうてさるに扨とけくじよせて置
乱やうて語の抱語されやさんのそで語りよしか
まねども女房とせうく一目見んともと衆さ
ふたとせ二年わかれ淚しぬ契りなり

尽しまして哀なる理を合てて涙となかし袖を志
ぼりそりしぞ江雪入道の事我小田原にあり
てよく存ぜしかど、ひとへにかはらぬわりに
雪斎偽よて定家の跡を継ぐ由申しければ
氏直やがて酒宴の時彼江雪を偽るとその道
家と持なしに興ある人にてぞありける
宏才弁舌人にすぐれ上仁義の道を文
武よなさし人也。弓馬遊興の時も氏直公一門
家老衆の中にも其里始ひさ一年秀吉公在
世の時氏直使者として江雪入道上洛せられしに

秀吉公對面ありしに若者どもへも礼義の次第
勤労也と御感ありし也氏政没落以後秀吉公へ
めし出され板部岡江雪山上道及孫次人々は常にまれ
なれしの和ひてまゐりけれそれより後に八丈島乃女
房なりしさる事古き文にもかくされ先見ん雲
集の題号に應じ久益和抄を記しける也

○清水太郎左衛門大力の事

是もむかし伊豆の國の住人清水上野守は小
田原北條家譜代の侍関八州にも名をえたる武
士なりされば上野守が妻女山上の社氏神へ宿
願ありて参詣せる途中の坂にて牛に穀物を二俵
つけたりけるがありて見ればわしと足二つとりけへて
きしの岩角に懸りて留る荷縄を切おとし谷
牛谷へ落て死すべし引上べき様なくて不便な
る事なりしに女房是を見てかくさまじの者ども。
一人そばへよらず牛としてそれをいだひて宙へ持上
道中にて牛を立させける女の力人間のわざにあら
ずとて人々沙汰せり是を腹に男子一人あり清水太郎
左衛門尉是なり母の力を請次大力の名をえて
或時太郎左衛門甲斐黒といふ馬を一疋

将ハ一月に大豆を一斗くらふ。悪馬なりけれバ乗りの
なし。馬屋の内を出す時は中間六七人ならでは綱
を付て牽出し。轡をはむる事なし。されど大兵左衛門
此馬に乗て飛乗。鞭を打てもち馬時まはりて走
まはれバ。血を吐て死ける。大兵左衛門。蛇なりける
綱を付て乗べし。されど信玄をはじめ。将に数度の
合戦に先をかけ。強をくじき。敵をなびかし。味
方をたすけ。剛者の名を得てけるとぞ。駿河の国中
長久保の城主なり。甲州信玄勝頼父子とても
うらみ共に一度もこれをとらざる人なり。然に

一年信玄ハ参州源家康公とあらそひの時遠州へ信
玄より氏政へ加勢をこひければ則付て大藤式部
少輔。清水太郎左衛門尉大将として。二千騎の軍
兵を卒し。信玄に加勢せられける。然ば元亀三年
壬申十二月廿二日申の刻より戌の刻まで。家康と遠州
味方が原の合戦に。信玄勝利をえられけり。
此時大藤式部少輔ハ討死す。太郎左衛門尉ざい
を振て。諸卒をいさめ。樊噲をもあざむくばかりにて
さわるにおよばず。敵をいくんもなく。中にも金の
馬じるしひらめかしけるが。其の鐙見ゆる武者一

綺人とればしくて郎従わきまへかごく落もなき
太郎左衛門尉是を見てくく狗に斬りてのぞきま
じは大勢をなげてまびくるは鳴神のごとし。
郎従これはひりよをそれ左右へ分て逃退く
上付甲のしころをはんで引返し鉢の前輪に
まし付狗が首よそしてまり乱に狗が首太刀
左衛門尉といふ大力の名をえたり

○菖矢軍の事

見しを菖関東諸国に弓矢を東西南北に
といくぞくるひ狗んことなし。玄猪に待る人なし。

鉄炮とみづけ菓とわきせぢ弓の弦と号し矢を
紙ゑむ木多木あどぬくま落をけづるによはう
なるとも又鉄と木様のごとく外のへぎとのき
のごとく紙り矢の根としと是とすやうし名付
毎年七月には七夕の矢と号し大名小名鉄目
侵に主人へ上る十節の間又りはすやう又ひ羞
木深い流を是と称矢と名付くり是時衣
鉄炮ハもくなく弓ハわれ目との冬をひに
矢狙通りれば主人より矢数と諸待へくだり
きまと敵をくもたれへ来る時ハ矢来引強弓と

こしひ矢下と書付たる鏑矢をとりて敵のそな
へを射くづしけれど。是とのかし軍とかや。天正七年
の秋武田勝頼伊豆の国に向て進発し浮島
が原。三枚橋に陣をとる北条氏政も出馬し伊豆の
国かりはからず。三島にまうけて立対陣を張てさ
らひたりけれど。ことしも暮の月も暮ればさきての
者敵陣へ夜討とよせもせこはへて国の
案内をよくしる者を揃る者なる者才覚有べし。式
名を乱波と名付国大名皆抱持し。彼へ星夜討
の時いかれば先立まはり。盗取く持をもて

てかりしかやうなる時は道にまよへども足軽九十も百
も二百も三百も伴ひ敵国へしのびいりて或時は敵
村々乱捕し或時は城へ忍び入或時は陣屋へ行
中に隠れ居て毎夜敵陣へ忍び入何事にても
あやしきはかりごとを敵にしかけせども悟り得ぬ是をかま
里見しのびたくさとも名付られけるとぞ。或は忍の
びよもりと号すかくさうらひらべしとなし。
とくさ。忍びと云二字をとなへしとも。或文には窃
盗の外を人を忍び上手と称せられ又窃
盗の二字とぞしのびさましれの名なるが。故に又

くさと云字を竊とよりは末の士卒し夜中に
窺月へ行晝も草に臥て敵をうかゞふ覚と草
外にもいひ流はしたるが下略して草と名付るとかや。
御草子と云字を書べきを今の時代は作法多
ほと云義なれば忍し待る陣中終夜篝を焼
夜明ければ先手の兵士に窺月へ日く出向て
陣より西へりし若手の待けまれと心がくる茂まは
其待中とはよんで其陣の見へたびよ寸を出
出かひ矢いくさとなりと見ぬして折りかさ
さびせりかひ軍なりとも先手の役さして

日くの者をくらひなり仕場居の屋を遠近に拵くべし
乃地なりは或は森林藪せこゝろへがくしをよく西の
人数汁ぐさきが故敵か多勢なりといへた窺を
しきこそ事やみぐ〳〵しく経る双方心をつかひて。
味方も無勢なれば士卒をくりくばりかくし歩
立の者どもと出わに馬上も二十騎三十騎もせ
加へて下知をつけは大将をうつ等を乱をと見る
に前登に進む者は首をとりつゝされつゝ武勇の
ある者共勝を争を返引に自を押て組みとぞ
除義深き民親家中にのみ味方家尾は地を

きこゆる強弓なり。先登にすゝみければ。ひしなり矢をつがひてのまゝでとりの事なく。忽射殺をしたり者多し。是を見て。敵方より武者一騎すゝみ来る。青木角蔵と名のりて。左京亮と渡り弓手にはれあふ斗なりけり。矢をはなちければ。左京亮敵の弓と引ければ。およびやうど射る。此矢あやまたずも弓の脇よりひを射とをしのぶかくて角蔵弓をひんともれたる痛みなりければなをしてひらき逃くだ左京亮又二つの矢をはなちて射る馬のかを腹にあたりて。せんかくなりの馬ハたをされけり

をはなちければ。角蔵馬上より落ければ。味方是を見て。勝どきをどつと作り。此仕合とも日の矢軍の勝負の験として。双方の士卒われわれ引しかば陣を立かゝつてしばし敵がこらへず。一人弓に矢をもちて味方の陣にはしりかへり。向いさむ。是へ居出る者は先陣のそこなひよとて。馬上より射おとされし。青木角蔵が使者也。矢ごろに相模の國三浦の住人鈴木左京亮にあり。勝負の射手に。敵にうちまけなし。それ戦場に出て討もうらくも武士の名誉らむ。其甘懐せし。弓矢軍にかゝるまで

一方から一方まで、つらぬくこと、日の運命の厚薄によ
るべけれバ、負たりとも恥辱にあるべからずと。総じて
と日角遊にあたる所の矢へならべ、やさの数矢也。況て
目がけて名を家のこともとゞろかしめ、わざむしく候合。又とこ
するは遺恨あらんことなし。組緒月の単に矢。総流にさ
するやわへてりて角遊と月。注木左京亮殿と
遠会の志をしかバ、送りかへどく云て名字書付さ
る。流矢二筋射くとるを、左京亮は矢を請丸使
者に向く云いは、先陣のうけにお数矢とりて射なる家
いさくり狸賎の給はわくとも。我まさ敵をとんかけ。矢を

打流ひそる時刻にまた木角遊放案外に、那須
てそらひより弓にね白ひもて、いく火の仕合也。
遊遠根にて放ちしかど、打落打合をゝらとて、銅
より落ちけれバ、矢を取て、大鳥服の根を二筋
抜出して射みるに、諸人是を見て、義をもち、起を
なりくする武士の振舞かなとて、みなかれと敵を
味方も感歎せり

○松尾乃茶への事　付　山上宗二事

見し古今、世上に大人も小人も茶湯をもてあそび
給ひぬ。江戸の町中も俺数寄ならやみと見えける。

家に出る東林と云人へいひたるべし祖父松尾
と云ふ天下無双の茶湯者へと黄金を茶に買ふの外
世の茶わめ多数ある内よりして三つ四つの一筋あり
いまるに備り甚たる事ども見事にて志あるしさ。出と
茶湯もの一ぐりしと思し人へ物語し給ふ故に茶
へと一月ありて出る此度を下にしてまなび。
そそれふとも珠光が名をせめて一服は家財に
かへてもおしくないと益なきまじ。昔は十石の茶が
と申し成人ハ此茶を持ち秘蔵せる物に千金の
名物と云人へ米は十石の田地にかへて茶湯をも

ある事しるしてここに東山殿は世の中の家財とれがと
人さる心ざし。さてこそ天下の数寄者たりと感ある
て後へ御物よりとれ三十石と名付け乱後にこの
ことの茶入の蜂屋紹佐といふ人に渡る。是も後場宗綱
所持の後は関白様へのぼりて天下に比類なき
名物なりとぞ。後に此安といふ人に渡して是も
まさしく此場より子の家易は上宗二と云て世に
やさしき数寄者ありしが秀吉公の時代に宗易へ
物よりて宗二八耳鼻をそがれ流人と成て関東
は下なる北条の守護小田原民部に属さし

殊もと数寄者の時節なれバ諸人宗二と号数
天正十年小田原籠城の比までに一所にて宗
二物語とくりしく書置しが茶湯に趣じて書物
となく師もなしそれがしおの名物とをれば見
去ばく上手の数寄者に就くとし。書秘茶
湯にも紀ね事ば是則師匠なり。も上数寄者の
覚悟禅家をするとも。いわゆる数寄の名人と云ば珠
光。引拙。紹鴎。此その人也。殊に珠光の一紙目録とい
ふものハ紹鴎添月明の大事ハ継古の時の日記なり。
それに引拙。宗珠。紹鴎などの追加せられたる一巻

なりとも今はあるべからず。されどもむかしの名物多き中に。
三日月の壺といふハ大かたへこなごなにくだけしを継けりと
て名付給へり。紹鴎ハわづか三十余りの年。奥州の名所
松嶋にたとへ名をくだし。面白くこそ名付られたれ。
なぞしこへ藤原殿此比がとそのごとく物名なでさ
もとが縁へ名付て名付とて子へ。東山殿御説ん
て是ハどのつがいに名のたぐひの格子にもとりとも御茶道
ろつかなもてなりば此れがの茶しけ上に高のふり
する極に於しるさなり。或時心数細幺の刻。此盤に
付て受者を仕べきとし。紹なり御座に

際しけ。様は声もくわしく、かしこせられけり
寅申ハ天王寺の市なくなし出しけり。天王寺にハ
市ハ寅の日と申の日立市なれバ、是を名とおびたり。
去し立ハ京山崎の市ハ物事の時文ともに見給ふぞ。
是つゞきを此結んとぞ成
まづつきもんの事のせうしうをとくとし再
少く名付給へり。さ外茶の名物茶ハ茶壺。水指
花入。釜。香爐。墨跡のしきれたかけて置かる。
是皆ひがし山殿の時よりこのみて、名月明とりてもつ見
出し目ひ給へり。それ茶ハ茶よりも壺にかけて

善悪ともかへりて又をして能き湯の加減よし。茶の湯の
焔も浅深わり湯の沸たぎりおか六調子の次ぎ。蛭香早
香松風真眼香沢。香也。こ香也の時分内まさへ口
味をもしとも上数寄者もおなかなるべし古今唐
物を集めかざりて数寄者ものへと大名どもと名付
みうし物をなく目もさて茶湯を上る。右の三ケ條
調ぞなとバ数寄者一道の名人とい、数又一物もなど
志て胸の覚悟一つ兆一つ作りいてい三ヶ條相
叶ものを茶湯者と云ふとかしもれし。是等ハ二の
侘也給ささんに茶湯の名も價のあさきをとえる

ぬべし。されど猶又数寄者などハ学ずくなき人ハ斎に出
たる道具をとりしとさだかならぬ珍肴美膳をと
こしらへて外見をとりひん清浄にもなく唯其時の
氣味を賞しあひなば茶湯ハ神妙のかくさをも時の賤
上下の隔ひなきさしもよされしそ耳にまさらず
見苦しかり

○前陣軍に討負二陣出て切返す事

此よしにて昔老士語りけるハ我数度の軍にあひし
ひ大合戦に於てハただ一勝負也有無の二つに
こそ有けれ先陣の者ハ九死一生にて討死ぬべく

樊噲と云ともわざわざしく討負をかへしたるはなし
され餓鬼共もとられ其大合戦に崩れたる引て返
せし事ハなし然に小田原北條家五代の内数度の
大合戦に討勝たる様又味方負たる事なしと云り
然りといふ一度も大負なし是定をとりて一の法度
在り用兵の敵也それハ必ならしもかねての軍法
おそなへと二の備随て腹よりも一町隔てけり
一備への内前後に武者奉行をそへて其者を
ちんぐりの奉行そなへの内へ追入べし出る者あれバ
ゆさの奉行をさへ下知をも上旗奉行検使

どして。雑馬の武者。五陣を馳廻て。五陣一町で
ゑきる男にぞ。紛るゝ者あらば。是非を論ぜず切捨る
ゆゑに味方の先陣軍に討負敗北すべしとて二陣
の武者ども先立て備へとどまり矢ごろに立塞
を兆て。敵をも味方も入まぜにせんとて。後陣の味
方の陣さきにとどまれば左右へ分れてさへぎりける。若
それで。ふけりんとする者あらば切て捨られけり
一人も得ざ敵にも軍になりければかなはじと逃げ矢
飛にて逃来る。後に味方陣にはこぼるゝ。威ひとなく
かなはじと前登にまでむ者引をしれぬ残

叢まれくかりしどとく。古敗軍せずして叶ハざりしを。
北條家の軍。二陣ありて切をとも事なくやまざる。
なりんげく。享禄三年庚寅。六月十二日武州
小沢原にて。上杉朝興と北條氏綱合
戦に。味方の前陣討負ることに九二陣にて切
勝ち。その余人討死ス。氏康と里見義弘
總の国。国府台合戦に。先陣討負ると二
ども二陣にて切勝ち。大勝あり。件の軍法
氏綱時代このかた北條家にありけるを
見る。軍に大負あるハ備を乱すが故也。一合

戦切勝とハ是。新手の敵に二度切勝する
時ハくたびれ人馬ども筋力つきていよいよか
もうかよはくしても勝とんども勝いくさの長
途となるハ不可也。士卒おのおの家で首
をとらんとあのつれともつきまへども長を
ひかへる時に敵そこの藪せこえもの人へ三
人ちりぢりに出て矢石をうけれつゝにはぐくぶる
敵むかひて見て前にけたる者一人列ある也。
わとの者やちなして後をききかくとも付
説にとゐてハ山人百姓が家へ入してしらかし
て麻弓を射かけなどして大崩きする事ひつ
せりされたる法一揆にハ定めてつゝ時にのぞんでせ
まわひ軍にハ勝てもよくなき事なる也。負て行事
なるをも許さぬくハ君命とも存ぜられども帥将と
も見ひもど敵によりて勝絶むなハ勇士のとなれ
こともしらぬなる也。軍陣にならひ公私の務に付て
時ハ不知なくハ討死し遁るべきをしらぬと知らぬハ命と
まいらす後日に恥辱をさらさぬる也と仁義の
勇士といふなり。是ほしまじきをとけ退くべきをしらぬとの
なれども討死するハ義に背くと血気の勇と云。

一方の武勇と思ひなば場所をしつて肝要也。人と
思ひなば死にくきなげきとも心得し。討死するハ犬死なり
古語なり

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉ハよるの
錦なりけりとよみしも是によそへておもひ出
せりけれハ、ある人の見る所なくしては万人にぬきんでし武
勇をあらはすまじきとて、討死する者ハ武名を子孫に
つたふべしけれハ、ある人の一言ハ俗士の千言に
まされるとかや。秀吉公時代濃州柳
瀬表の合戦に七本鑓といはれしハ加藤肥後
守。同左馬助。福島左衛門大夫。脇坂中務。糟屋内
膳正。平野遠江守。片桐市正。此の七人也。この
人々大名に成ての後も此名にて戦場にてお
登りありしも此の君也。これ上略をとゞめ大勇こ
小勇との二名あり。文を学び武をたしなみて
智謀兵術をもつてもつはら士をひきいて万
人に勝事をする人を大勇といひ、短慮を
旨とし一人の敵にむかつて勝てするをとけ
をそひて討勝を小勇と名付ハ、むかしへ、と停
為朝は源九郎義経。ひとりけるけとある

こせり平家一谷に城をかまへてこもりし時鵯越さ
いふ人力のとゞかぬ高山より義経ひとりぢんざ
りて浮ぎを先として下知せられければ平家も後
平家讃岐国に城を構と具と源氏の軍兵数百
艘の兵船を用意し渡海せんとせられし時渡
風おもてにて家船かれかはど義経公平家追討
使の宣旨をうけ給はり悪風なりし逆風を
おそれずと運は天にありとて元暦二年
二月十六日ごしも纜をといて家出と渡下知あり
僅る以上五艘渡国に着岸し平家と上

討ととハ此人ハ血気の小勇のかうまひゆへ大
将の器にあらず紀母氏不可也と雅に義経公へのいさ
めとも見ひとも道理に流ることなく渡りがく
されバ義経梶原の自をおそれ内に若者不
義なる粗胡公と不快ふりてより讒して宮
せられ終ひに奥州の粗胡公の介竹の冠者義秀が
城を責られて此実ハ万人にぬきんでゝけやぶ
里けれく首を討れ摂州一谷の城をせむる
時此実秋中に先陣をまつり卯の刻門外に
すゝみ源氏の侍熊谷次郎直実先陣と名乗

小名ハ宗鐵中山式部少輔と申す。姫路三郎右衛門尉
盛次、恩地左近太郎、京極ハ木戸といふ所にて出で給ふ。
此実ハ弟士ほかしぞもる所。天下無双の剛者と称
朔けしびろき事。されどもつぶされたる拘じらの
役にて後に御付けれども、坂次郎、家来土肥次良
実平ありし一方のかしらにかさむとあり。是ハ軍兵
の統領とありて下知をする事。私は又とどいふ弐
おのひとハ、智略兵術と身にもろうがとの。それ大将
おそたりて文を学び、黄石公がほとりのすけもとか
給りれば、呉子、孫子が秘をも伝ふと自ら

軍兵を下知をし、論語に三軍の帥とばうべし。匹夫
の志ざしとばうばうべしといへども、が志んとかまれとも
むくへ、父と争ふび、功者によりてこそ武略とやうきんへ
きべりしも馬とのうぐ。さし拘すども、我力によりてる
さが方しども、わざはひを招くべしと申しかれ
ば、功者の嗜みなり。なかんづく歩立の軍、山坂にて
さぐ給へみだりさと用ひる。是故実なりと拘がる
せり

小條又代記 第五終